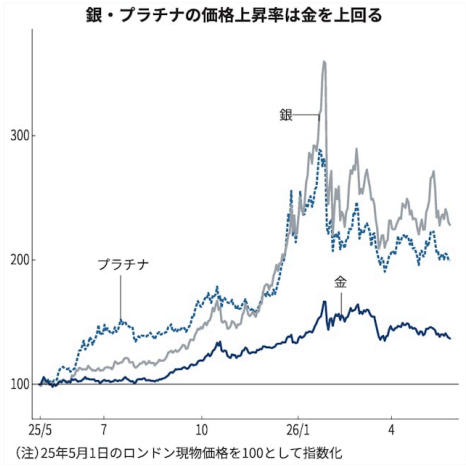
銀プラチナETF、相次ぐ国内上場　「産業メタル」に集まる投資マネー

2026/05/28 19:29 日本経済新聞電子版　1625文字



国内で現物の銀（シルバー）やプラチナ（白金）を裏付けとした上場投資信託（ＥＴＦ）の新規上場が相次いでいる。銀とプラチナは金（ゴールド）と異なり、産業用途といった実需の強さが特徴だ。2025年は需給が逼迫して相場が急騰しており、26年も投資マネーを集めそうだ。

Global X Japanは28日、「グローバルX シルバー ETF」を東京証券取引所に新規上場した。ブラックロック・ジャパンも20日、新たに「iシェアーズ シルバー　ETF」と「iシェアーズ プラチナ ETF」を上場したばかりだ。

25年11月下旬にもステートストリートが２件の金ＥＴＦを上場している。

ブラックロック・ジャパンの横山賢志氏は「国内でも高まる個人の幅広い貴金属に投資したいというニーズに応える」と新規上場の狙いを語る。

銀・プラチナが注目を集める理由は、値動きの大きさだ。25年は1年間で1トロイオンス（約31.1グラム）あたり銀が24年末の28ドル台から71ドル台に、プラチナは900ドル台から2000ドル台に急騰した。どちらも価格は2倍以上で、上昇率は金（6割高）や、主要な株式指数をはるかにしのぐ好成績だった。

直近の国内価格では、地金商最大手の田中貴金属工業が28日午前に公表した店頭小売価格で、銀は1グラム434円、プラチナは1万1050円を付けている。

価格上昇の大きな要因の一つが、金価格の動向だ。一般的に、銀やプラチナの相場は同じ貴金属の代表格である金に連動して動く傾向がある。

昨年、金は米関税政策をめぐる世界経済の不確実性や地政学リスクの高まりなどから「無国籍通貨」としての需要が一段と高まった。金は通貨と違って人が発行することができず、埋蔵量に限りもあることから資産価値を保存しやすい特徴がある。投機的なマネーも巻き込みながら、金価格は水準を切り上げている。

金よりも銀やプラチナの価格上昇が大きくなった背景には、どちらも需要が供給を上回る状態が何年も続いているという市場環境がある。投資と宝飾品の需要が8割を占める金と異なり、銀は6割、プラチナは7割を産業向けの実需が固める。需給の逼迫を手掛かりに、投資マネーが流入して相場を一気に押し上げた。

銀は最近では人工知能（ＡＩ）関連施設向けの需要が注目されている。熱伝導率の良さを買われて、データセンターなどでの活用が進む。太陽光発電パネルの製造にも使われており、マーケットエッジの小菅努代表は「AIや脱炭素など株式市場で話題になっているテーマと関連が深く、マネーを引き付けやすい」と指摘する。

国際調査団体のシルバー・インスティチュートが4月に公表した最新の需給統計によると銀は25年まで7年連続で供給不足の状態にあり、26年も継続が見込まれる。

プラチナの最大の用途は地金でも宝飾品でもなく、ガソリン車やディーゼル車など自動車の排ガスを浄化するための触媒だ。近年は電気自動車（EV）など電動化の流れで自動車向け需要は徐々に縮小傾向にあった。

ただ、トランプ米政権の動向や欧州連合（EU）がエンジン車の新車販売を35年に禁止する方針を緩和したことで、プラチナの需要は維持されるとの思惑が広がった。英精錬大手ジョンソン・マッセイ（JM）はプラチナが26年も4年連続の供給不足になると予想する。

もっとも、マーケットアナリストの豊島逸夫氏は「銀やプラチナは金よりも価格の変動幅が大きく、金融商品としてはハイリスク・ハイリターンだ」と注意点を指摘する。

金は中央銀行が外貨準備として購入するなど歴史的に不確実性に備えた「価値の保存手段」としての側面が広く知られているが、銀やプラチナは値上がり益狙いが大半で金のようなヘッジ需要はほとんどない。相場が下落し始めると投資マネーも一気に流出し、下落を加速させる傾向がある。

マーケットエッジの小菅氏は「言うならば金よりも攻撃力が強い半面、守備力が弱いキャラクターだ」と表現する。

（神山美輝）

【関連記事】

・金買いに走る中央銀行、相場下落で「安値買い」も　脱ドル依存狙う
・銀90ドル復帰間近　AIブームで2カ月ぶり高値

許諾番号NK003265 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。
本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。
本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。
Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.